

ヲトコとランナへの道

— 上代から中古へ —

上野 辰 義

- 一、はじめに
- 二、ヲグナ探索
- 三、ヲトコの動向
- 四、ヲトメの性格
- 五、ヲミナ逍遙
- 六、ヲトコとランナへの道

中古に至って、男性と女性の総称となるヲトコとランナは、上代において、阪倉篤義氏が『日本語の語源』で述べられたように、ヲトコはヲトメと、ランナ（ヲミナ）は、ヲグナ・オミナ・オキナとともに、それぞれ別の意味体系を構築していた。そのような別体系に基づくヲトコとランナの二語が、中古の初期に、男性・女性の主要な語の組み合わせとして成立して来るには、どのような事情や動きがあったのであろうか。これらについては、それなりの量の発言があるが、多くはない現存資料を検討することで、私なりに改めて考えてみたい。そうすることで、中古以後のヲトコやランナに関わる諸語の理解、国文学作品の理解に役立つものも出てくることを期待したい。

現代語において男性と女性を指し示す一般的な語である
オトコ（古代語ではヲトコ。トは乙類、コは甲類）とオン
ナ（古代語ではランナ。さらにラムナ、ヲミナに溯る。ミ
は甲類）との意義的な対応関係は、平安中期に入る頃には
ほぼ確立していた。

帝の御装束、ひはだいろのおほんぞに承和色のおほん
はかま、をとこをむな、左はあかいろにさくらがさね、
右はあをいろにやなぎがさね、（亭子院歌合・序）
をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみん
とてするなり。

（土佐日記・序）

しかし、この両語の対応関係は、上代に溯れば、周知のご
とく自明でなかった。上代において、男性と女性を指し示
す一般的な語として確認できるものはヲトコ・ヲミナでは
なく、ヲとメ（メは甲類）、そしてそれに続いて、或いは
平行して用いられたのは、ヲ・メの複合語であるヲノコ・
メノコ（ノは乙類、コは甲類）であつたからである。

八千矛の神の命や 我が大国主 汝こそは遠に座せば
うち廻る 島の崎々 かき廻る 磯の崎おちず 若草
の妻持たせらめ 吾はもよ 賣にしあれば 汝をきて
遠はなし 汝をきて 夫はなし（古事記上巻）

鶏が鳴く あづま平能故は 出で向ひ 顧みせずて
勇みたる たけきいくさと ねぎたまひ

（万葉集卷二〇—四三三—）

（吾今囁く玉生兒、必）當為レ女（矣）へ女乃己奈良
牟（日本書紀私記乙本神代上）

もつとも、このヲ・メに先立つ同性格の語として、大野晋
氏は、オキナ・オミナ・イザナキ・イザナミ、カミロキ・
カミロミ（キ・ミはそれぞれ甲類）などのキ・ミの存在を
説かれている。しかし、文献的に見いだされるこれらの
キ・ミは、いずれも造語要素としてのものばかりであるの
で、キ・ミが男性・女性一般を意味する単独の語でありえ
たとしてもそれは、『古事記』成立以前の或る過去におい
てのことと見られる。

ともあれ、上代において男性・女性それぞれを総称する
語は、ヲ・メそしてヲノコ・メノコであつたと見られるが、
こうした状況の中で、後に男性・女性それぞれの総称とな
っていくヲトコとヲミナは、このヲ（ノコ）・メ（ノコ）
で指示される男性・女性全般の範疇内部で、或る基準、し
かも別々の原理に基づく限定的な層を、それぞれ指示して
いた。阪倉篤義氏はその辺の事情を、『日本語の語源』十
九頁以下で次のように言われる。ヲトコはヲトメとともに、
『「若返る」という意味を表す動詞、『ををつ』に関係づけう

る語」ヲトに、男女を区別するコ・メがついて、「『若々しい活力にあふれた男性、あるいは女性』ということ、もと、結婚適齡期の男女を意味する語であつたよう」で、それに對し、ヲミナは、ヲグナとともに、年少を表すヲを共有し、女性を表すミ（甲類）と男性を表すグとを分有して、少女少年をそれぞれ意味し、さらにヲの代わりに年長を表すオを有して老女・老男を意味するオミナ・オキナと相對していた、と（この場合、ヲグナのグとオキナのキは〔g〕・〔k〕という軟口蓋閉鎖音の子音を共有し、前述の男女の性別を示すキ・ミと連なる）。そして、これらの諸語の内、ヲトメとヲミナの両者が、意味する「年齢の似やりもあつていつのまにか混同されてしまつたらしく、その結果ヲトコ・ヲミナの對語關係が成立し、さらにそれらの意義も、「特に結婚の相手として考えられる男性を意味した」ヲトコの「適用の範圍が広がつて、男性一般を言うようになつた」のにつれて、「その對語である『をみな』（引用者注、現代語の）おんな」の方も、女性一般を指し言うようになつたのだと、具体的な論証は特にされずにその道筋を示された。この道筋については、大野晋氏もさきほどの文献中で、次のように言及されている。ヲトメは「未通女」とも書くように、妻問ひ婚の時代であつた奈良時代には、まだ男が通つて来ない女に多く使われたため、

そういう女性を女性の代表とするのはいささか不適当であつたかもしれず、そこでヲトメに代わつてヲミナがひろく使われるようになり、女性一般を表すメが動物のメスまで指すものであつたために上品さという観点から避けられて没落し、ヲミナが女性一般を指すようになつたのだ、と。

こうした、大野晋氏を経て阪倉篤義氏に至る、上代の男女に關わる諸語についての見解は、それまで意義不明などと言われもしてきたヲグナの語を發掘し位置付け、男女の性別、及び主として年齢に由來する性格とによつて構造化されるヲトコ以下の諸語による語彙構造を提示し、男女一般を指すべくヲトコ・ランナの對語が成立していく事情を見通した点に大きな意味が見いだせる。しかし、そこに示された道筋は、両氏の論の目的がそれをめざしたものであるために素描にとどまつている。實際、その道筋の細部まで明らかにしようとしても、他の時代以上に、上代においては考察資料の量的限界・質的偏向・表記文体等の制約もあつて、困難な側面が強い。だが、ヲトコとランナの組み合わせが成立する事情を可能な範圍で検討しておくことは、中古以降のヲトコ・ランナの意義的位相を理解する上でも大事であらうし、ヲトコ・ランナ以外の諸語の連関、例えば上代におけるヲトコ・ヲトメの軸とヲミナ・ヲグナ・オミナ・オキナの環との關係や、ヲ（ノコ）・メ（ノ

コ)の軸を含めて、これらが上代において共時的・通時的にどう交渉し合っていたのかを考える手掛かりも得られることに連なるだろう。以下、このような位置付けの下、ヲトコとランナの結びついてゆく道筋を追ってみたい。

二

まず、我々になじみの薄いラグナから見よう。この語は阪倉氏によりヲミナ・ラグナ・オミナ・オキナの環に入れられたが、実際の語例は、記紀の倭建命関係のごく少数に限られている。景行記に「小碓命、亦名倭男具那命。具那二字以レ音」、景行紀二年三月条に「小碓尊、亦名日本童男童男、此云ニ鳥具奈一。亦曰ニ日本武尊一」とあって、ともにヤマトラグナノミコトという名の構成要素に見いだされるものである。『日本書紀私記』等の訓注類に見られるものもこの関係ばかりで、倭建命の名の他には、安康記の「大長谷王子、當時童男」の「童男」を、これらの訓注によりラグナと訓んでいる例があるだけである(「男具那」「童男」の表記も、記紀では、倭建命の名として他に一例ずつあるのみである)。

倭建命がヤマトラグナノミコトの名で活躍したのは、熊曾の弟建から「倭建御子」の名を献上されるまでの熊曾タケル討伐の話だが、この時の小碓命の年齢は、熊曾タケル

を討つ詔を父景行天皇から受けた際に、景行記に「其御髪結レ額也」とあり、これが崇峻即位前紀にある「是時、厩戸皇子、束髪於額、古俗、年少兒年、十五六間、束髪於額。十七八間、分爲三角子。今亦然之」の記述から「十五六間」と判断され、実際、景行紀二十七年十月条には「(小碓命はこの)時年十六」と明示されている。ここから「童男」という表記と併せて、ヤマトラグナノミコトのラグナは、成人前の十六六歳の少年を意味していると見られ、阪倉氏がラグナを少年の意とされたのはとりあえずここで了承しておけるし(もつとも『古事記伝』も既に「童なるを、男子を袁具那、女子を賣具那と云しにや」と言っている)、またそれは安康記の「童男」とも矛盾しない(もつとも、これについても『古事記伝』では、「童男」の時の大長谷王子へ雄略天皇の行為は童時のものとは思えないので、袁具那とは年齢に拘わりなく、童の髪を言うのであろうとしている。この髪形との関係は、西郷信綱氏の『古事記研究』二三九頁や『古事記注釈』などにも受け継がれ、注意されている)。

しかし、ラグナを、ヲミナ・ラグナ・オミナ・オキナの環に入れるについては、もう少し形態面での補足がほしい。ヲ(年少)とオ(年長)の対立、女性を表すミ(甲類)のヲミナ・オミナにおける共有はよいとして、男性を表すベ

きキ（甲類）が、オキナの〔ki〕はよいものの、ヲグナにおいて〔gu〕とあるのは、どう理解しておいたらよいのだろうか。これについては、金田一京助氏が、「古代に於ては、グとクとは同音と感ぜられてゐた。うぐひすへ憂く干ずを引つ掛けて洒落にしてゐた程である」（『新訂増補 国語音韻論』一六八頁）と言われている点や、同じく金田一氏が、共に狭い音である〔u〕と〔i〕（あるいは〔i〕）について、これらが古来から相通していたとして（前掲書二四〇頁）、ウロコ（鱗）とイロコ、ウヲ（魚）とイヲ、イモ（芋）とウモ、クチワ（口輪）とクツワ（轡）、エミシ・エビシ（夷）とエミス・エビスなどの例を挙げられておられるのが参考になる。kɛ ∨ ku ∨ gu の変化を想定して、ヲグナの原形にヲキナを復元することが可能になるからである。この復元はあながち的外れでもない。『日本書紀秘記』丙本景行紀を見ると、「童男」に「字久奈」、「女人」に「字（乎イ）牟奈止毛」の訓が付せられているからである。これは、ヲグナ・ヲミナの語頭に位置する〔ɛ〕が唇の狭められる両唇音であるために、wo ∨ wu (u) ∨ ɛ の変化を起こしたものと考えられるが、この語頭の狭い wo ∨ u の発音の次の音への影響を考慮するならば、wokina ∨ ukuna ∨ uguna という変化も十分予想されるからである。ヲミナの場合は、womina ∨ u muna ∨

umna となるが、これには、実例を指摘しうる。高山寺本『和名類聚抄』郷里部等にみえる信濃国小縣郡「童女」郷（現小県郡東部町と上田市の一部）の訓「乎无奈」がそれである。この地には中世に至つて海野荘が成立するが、『長野県の地名』（日本歴史地名大系二〇、四一頁）によると、正倉院御物の中に「信濃国小県郡海野郷戸主爪工部君調」の銘が発見され、「童女」が転化して「海野」になったという従来の説が必ずしも当たらないことが明らかになったという。つまり八世紀以前において、womina が umno でもありえたのであり、ヲミナの立場から言えば、これはさきほどの umna の〔a〕が、口を狭める〔umn〕の影響を受けて〔o〕になり、umno（あるいは umnu）に変化したものと見なされることになる（海野の立場からすれば、umino からの逆コースが予想されることになるが、この場合どれほどの可能性があるであろうか）。

さらに、ヲキナがヲグナに転じた背景には、wokina と womina の音の似寄りの影響も想定しうる。同じく音の近似するオキナとオミナにおいて、オミナが、omina ∨ onna ∨ onna ∨ o: na と転じてオキナとの形態的差を広げること、両者の聴覚的識別が容易になっていったように、ヲキナとヲミナにおいても、こちらはヲキナの方がヲ

グナと転じることで、同様の効果を発生させていったと考えられるのである。

こうして、ヲグナの原形であるヲキナを見通しつつ、阪倉氏の提示どおり、ヲミナ・ヲグナ（ヲキナ）・オミナ・オキナの語彙的構造を承認しておくことは十分妥当性があると思われる。しかし、ヲグナの語の明確な単独例が見いだせず、その存在が倭建命の亦名ヤマトヲグナノミコトの語中とそれに拘わる「童男」辺にしか認められないということは、ヲグナが、記紀成立時において既にあまり用いられなくなった限定的な語、あるいは古い語になっていたことを示すものと見られる。

三

ヲグナの対語であるヲミナの検討に先立つて、ヲトコ・ヲトメの対語についてみておきたい。

ヲトコは、『古事記』では上巻二神の国生みの条に「阿那邇夜志、愛袁登古哀」とあり、この所、『日本書紀』神代上では「意哉、遇ニ可美少男一少男、此云ニ鳥等孤一」とあって、ともにこれから国生みを始めようとする伊耶那岐命を指す。また『古事記』では、八上比売を得られなかった八十神たちの嫉妬によつて焼き殺された大穴牟遲神が蘇生する箇所に「塗ニ母乳汁一者、成ニ麗丈夫一訓ニ丈夫一

云ニ袁等古一、豊玉毗売と婚することになる火遠理命が海宮を訪問した箇所に「仰見者、有ニ麗丈夫一訓ニ丈夫一云ニ袁登古一。下效レ此」とあり、「丈夫」がヲトコと訓まれている。『古事記』において、「丈夫」の語で指されている人物は、他に、勢夜多多良比売の富登を突いた美和之大物主神（「忽成ニ麗丈夫一」。神武記）、活玉依毘売に通つた美和の神（「於レ是、有ニ丈夫。其形姿威儀、於レ時無レ比」。崇神記）と、神名中に「丈夫」を持つ秋山之下水丈夫と春山之霞丈夫とがいる。この兄弟の二神とともに伊豆志袁登売神を婚せんと争う（応神記）。こうして、『古事記』のヲトコは、阪倉氏が「若々しい活力にあふれた男性」を指し、「ヲトメとともに」もと、結婚適齢期の男女を意味する語であつたようだ（前掲書）と言われた所からはずれない。「麗丈夫」などの表現が多用されていることから、この男性の若いことが知られる。

『日本書紀』では、「鳥等孤」の訓注の付いていた「少男」の語は一書を含め二神の国生みの段にしかみられないし、『古事記』で「袁等古・袁登古」の訓のついていた「丈夫」の語も、ない。また後述する『万葉集』でヲトコと訓まれる「壮士」が一例、神代紀下国譲りの段、葦原中国平定のために天稚彦を派遣する条に「天国玉之子天稚彦、是壮士也。宜試之」とあるが、これは『日本書紀私記』乙

本に「壮士盛^{ザカリナル}人」の訓があるように、ヲトコと訓ま

すためというより、漢語そのものの概念を伝えるための表記である。また、推古紀元年春の「厩戸皇子は」生而能言。有^ニ聖智^一。及^レ壮、一聞^ニ十人訴^一、以勿^レ失能辨」の「壮」に関して、岩崎本日本書紀平安中期点に「ヲトコサカル」、院政期点に「ヲトコサカリ」の訓がある。

元来ここは「ヲサカル（リ）」とでもありたいところで、ヲトコが、男性一般とまでは行かなくとも青壮年の男性を意味して、ヲを駆逐した状態を反映している訓と見られる。ただ、岩崎本推古紀の訓がどこまで時代的に逆上れるか不明なので、今は参考程度に止めて置かねばならない。こうして、『日本書紀』では確実なヲトコの語例が少ないが、おおよそ『古事記』のヲトコの範囲を出ないものである。

『万葉集』では、ヲトコと訓むべき語例は、第二期以降の歌に見いだせる。『古事記』に見えた、男女の通婚に直接関わる例も、高橋虫麻呂（九一・一八〇九・一八一）や大伴家持（一九・四二二）・田辺福麻呂（九一・一八〇一・三）らの詠んだ菟原処女の伝説歌（ただし「知努乎登古」^⑩「宇奈比壮士」「小竹田丁士」などの複合語中）や虫麻呂の筑波山の嬬歌を詠んだ歌（九一・一七五九）などに見られるが、このような通婚・求婚の意味合いを弱めて裏に潜めたり、単に若い男性を指しているかと思られる例がかな

り拾える。月を擬人化した「月人ヲトコ」や「月読ヲトコ」もそうであるし、

月^レ詠

天の海に月の舟浮け桂梶かけて漕ぐ見ゆ月人壮士

（巻十・二二三）

七夕歌一首

大舟にま梶しじ貫き海原を漕ぎ出て渡る月人乎登祐

右、柿本朝臣人麻呂歌。（巻十五・三六一）

湯原王月歌二首

天にます月読壮士賂はせむ今夜の長さ五百夜継ぎこそ

（巻六・九八五）

メンタルな、或いは特殊なケースを想定しなければ、次のような例もそうである。

……稻寸丁女が妻問ふと 我におこせし彼方の 二綾裏沓 飛鳥壮が長雨忌み 縫ひし黒沓刺し履きて 庭にたたずめ ……うちひさす宮をみな（女） さすたけの舍人壮も忍ぶらひ かへらひ見つ 誰が子そとや思はえてある……（巻十六・三七九一）

大納言大伴卿新袍贈^ニ摂津大夫高安王^一歌一首
我が衣人にな着せそ網引きする難波壮士の手には触るとも（巻四・五七七）

——「壮」については、前掲の岩崎本推古紀平安中期点の

訓に「ヲトコサカル」とあり、また国会図書館本『日本靈異記』中巻三十四話「壮」の訓釈に、「乎土古尔」〔土〕は甲類の仮名だが、群書類従本には「止」とある。

また次のようなヲトコは、単なる結婚適齢期の若い男性から、妻子を養い、宮仕えや防人の任に耐える男性、すなわち壮年期の男性までも意味しようとしているものらしい。ちなみに、養老令によれば、婚嫁は男年十五、女年十三以上で可能になり（戸令24）、下級官人の出仕を除き叙位は二十五歳（蔭子は二十一歳）から同じく可能になり（選叙令34）、防人には二十一歳から六十歳までの男子が三年間務めねばならなかった（軍防令3・8）。

腋挟む子の泣くごとに 雄自毛能 負ひみ抱きみ 朝
鳥の音のみ泣きつつ （亡妻を）恋ふれども

もののふの臣の壮士は大君の任けのまにまに聞くといふものそ （巻三・四八一）
（巻三・三六九）

鶏が鳴くあづま乎等故の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み （巻二十・四三三三）

こうして、『万葉集』では、『古事記』に比べてヲトコが、結婚適齢期の若い男性から青壮年一般（岩崎本推古紀「壮」の古訓を重視すれば、さらに男性一般）へとその指し示す意義の内容を、確認できるところでは万葉第二期以

降広げているさまがうかがえる。それがなぜ起こったかについては、今詳しく検討できないが、ヲトコに「壮」「丈夫」「壮士」などの漢語が多く充てられ、憶良の「麻周羅遠の遠刀古佐備周と剣太刀腰に取り佩き……遊びあるきし世の中や常にありける」（万葉集五―八〇四）の歌などにヲトコとマスラヲの強い相関がうかがえるように、上代において、ヲトコの特質を、年齢の若さを基盤にしながら、年齢そのものよりも絶頂期にある男の充実した体力・気力の有無に見ている傾きが見える。この上代人の視点で、ヲトコが結婚適齢期の若い男性から壮年にまでその指示範囲を広げていく上での触媒となったのではないだろうか。

四

ヲトメは、阪倉氏の言をはじめ既に言われているように、結婚適齢期の若い女性を指すとみておいてよい。元来の事情は不明だが、用例的には既婚女性・非処女を問わない。ただその中で注意される現象がある。ヲトコ・ヲトメと対になって用いられる例が多いのは自然なのだが、その背景に呪術的、あるいは祭祀的な性格を持つものが多いことである。『古事記』（『日本書紀』のヲトメの例は、仁徳紀十六年七月条の、桑田玖賀媛に関わる「水底ふ臣の烏苔咩を誰養はむ」の独自例もあるが、性格的に『古事記』の範囲

を出ないので特に言及はしない)の最初の例である二神の国生みの例が既にそうである。ここでははじめ、伊耶那美命がまず「阿那邇夜志、愛袁登古袁」といい、次いで伊耶那岐命が「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言ったために、水蛭子と淡嶋が生まれてしまう。しかし、その後、天つ神の太占を経て男神から「阿那邇夜志、愛袁登古袁」と言うことによつて淡路島以下の国を生むことができた。つまり、天つ神の命に基づく重大な行為である国生みにおいて、その開始における二神唱和は、女神先唱が障害となつたように、国生みを成功に導く重要な呪術であつたのである。二神のこの発言が逐一仮名表記され、その発言の形態まで明示されていることもそれを裏付ける。他に、背景に呪術的あるいは祭祀的な性格を持つものでは、巫祝である「年少童子 俗、云三加味乃乎止古・加味乃乎止荒」(『常陸風土記』香島郡)、宮廷の歌垣における最初の寿祝の歌である「乎止売らに乎止古立ち添ひ踏み平らす西の都は万代の宮」(続日本紀宝亀元年三月二十八日)、御膳神八座に関わる記述と見られる「八乎止古八乎止咩定天、神嘗大嘗仁仕奉始支」(『高橋氏文考注』所引「高橋氏文」、伊勢国の地名由来の記事である「五十鈴曰、風土記云、是日、八小男八小女等 刈逢此、泗樹接、因テ以テ名クル也」(万葉緯卷十八所引神名秘書)等が拾える。

これに対し、ヲトコ・ヲトメと対になつていながら、呪術的・祭祀的性格を有していないと見られる例は、応神記の「秋山之下氷壯夫」・「春山之霞壯夫」の兄弟二神と「伊豆志袁登売神」(神名であるから呪術・祭祀と全く無縁なわけではない)、筑波山の嬬歌を詠んだ高橋虫麻呂歌中の「未通女壮士の行き集ひ」(万葉集巻九一七五九。これも呪術と全く無縁なわけではない)、万葉集で高橋虫麻呂(九一・一八〇九・一八一二)や大伴家持(一九一四二一)・田辺福麻呂(九一・一八〇一・三)らが詠んだ菟原処女の伝説歌中の「菟名負処女」「知努乎登古」「宇奈比壮士」等、派生語ヲトコサビス・ヲトメサビスの対である「遠等咩らが遠等咩佐備周と……ますらをの遠刀古佐備周と……」(万葉集巻五・一八〇四)などの例ぐらいで、これらは最後の例を除いて男女の通婚に関わっているものである。つまり、通婚・求婚を核としたヲトコ・ヲトメととも、一方で呪術・祭祀に関与するヲトコ・ヲトメも伝統的に存在したということである(両者は前者の性格を基盤として繋がっているものであろう)。それゆえ、雄略記に見える引田部の赤猪子が八十歳を優に越えていながら、雄略天皇から「加志波良袁登売」と歌い呼ばれるのも彼女が処女であつたからというより、そして彼女が天皇の命令を守り続けた事に対する賛嘆と彼女を無為に老いさせた自責

の念から天皇がそう呼んだというよりも、彼女自身が「加微能美夜比登（神の宮人）」であつたからだと考えられる。

ヲトメが若い女性を指すといひながらもこのような場合が存在するが、こうしたケースを除いては、ヲトメは結婚適齢期の若さに執着する傾向を見せる。『古事記』において、二十二の仮名例（赤らヲトメ・こはだヲトメ・伊豆志ヲトメ等の複合語を含む）で指示されている女性十一人と、「少女」の語三例（神代紀上に「鳥等咩」の訓があるので参考に用いる）で指示されている女性一人（崇神記・四道將軍）とを検してみると、通婚・求婚の場で呼ばれた女性が八人（伊耶那美命・沼河比売・伊須氣余理比売・矢河枝比売・髪長比売・伊豆志袁登売・輕太郎女・袁杼比売。伊耶那美命は呪術的側面も持つがここに入れた）、巫女或いは神女として扱われた者が三人（美夜受比売、引田部の赤猪子、波迹賦坂の二女人、山代の幣羅坂の少女。前二者は求婚・通婚の性格も持つがここに入れた）、臣下の采女として扱われた者が一人（袁杼比売。袁杼比売は求婚と采女と二回指示される）、というように、求婚・通婚関係が2/3を占め圧倒的に多い。これらのヲトメが、「愛袁登売」（伊耶那美命）・「久波志売（麗女）」（沼河比売）・「美人」（伊須氣余理比売）・「麗美嬢子」（矢河枝比売）・「顔容麗美」（姿容之端正）（髪長比売）などと多く容貌の美しさ

を表す語句とともに出現する点も、ヲトメが年齢の若さに関わっていることを示す。若さに拘わらぬ美しさがあるにしても。

万葉集に目を転じると、既に第二期の天武天皇治世頃に吹矢刀自が「河上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常処女にて」（巻一―二二）と、いつまでもヲトメであるように願っている例が拾える。ここでは、十市皇女かあるいは自分のいつまでも変わらぬ女としての若さを望んでいるのであろうし、同様の歌は憶良の「世の中 of のすべなきものは年月は流るるごとし……遠等咩らが遠等咩佐備周と韓玉を手本に巻かし うち子らと手携はりて遊びけむ時の盛りを留みかね過ぐしやりつれ……」（五―八〇四）にもうかがえる。ヲトメの表記にしても、「尾迹女」「乎等女」「乎登女」「遠等咩」「越等売」「乎等売」などの仮名書きの他、「海」処女（等）（巻一―5、軍王）、「未通女」（巻十一―二三五一、人麻呂歌集）、「嬌嬌（等）」（巻一―四十、人麻呂）、「弟日」娘（二―六五のみ、長皇子）、「海」童女（等）（六一―〇六三のみ、田辺福麻呂）と、早い時期の歌を含め、ある特定の時期の女性に関わる語が多用されているのも、ヲトメという語の持つ限定的なイメージの強さを想起させる。ちなみに、現実はともかく、養老令の規定によれば、前掲の如く、婚嫁は男年十五、女年

十三以上で可能であつた。

また、ヲトメの用法で顕著な傾向は、訓が確認できるものに限つても、地名などとともに複合語を形成して特定の個人を指す用法のあることである。「古事記」では「伊豆志哀登売」、「加志波良哀登売」（引田部の赤猪子）、「阿加良哀登売」（応神紀によれば「阿迦例蘆」赤れる一嶋等咩）なので対象外となる。「古波陀哀登売」（髪長比売）、「加流哀登売（杼母）」（輕大郎女）など、「万葉集」では、「弟日娘」（二一六五、長皇子）、「可刀利乎登女」（一四一三四二七、陸奥国歌）、「泊瀬越女」（三一四二四）、「葦屋処女」（九一八〇一題）「菟名日処女」（九一八〇一）、「鳴波多嬌孀」（二九一四二三六）などである。これらは訓の確定できるものに限つたが、「万葉集」の題中や作主として「出雲娘」「舍人娘」「清江娘」「依羅娘」「播磨娘」「常陸娘」「上総末珠名娘」「筑紫娘」「対馬娘」「土形娘」「葛鹿真間娘」「安都扉娘」「丹波大女娘」「日置長枝娘」「粟田女娘」「河内百枝娘」「巫部麻蘇娘」「縣娘」などと漢語表記されて、通常「……ヲトメ」と訓まれている特定の女性を指す例を加えるならば、その数は三、四倍になる。もしこれらの「娘子」をイラツメ・ヲミナなどと訓むべきならば事情は変化するが、「万葉集」において「……イラツメ」はと

もかく、「……ヲミナ」の確実な例としては、「宮尾見名」（一六一三七九一）・「東女」（四一五二一）。「女」をヲミナと訓む妥当性はかなり強い）など、ある条件下の複数の女性を指す例は存在するものの（ヲトメにも「安麻乎登女（良・等）」「伊勢処女等」など同様の例がある）、特定の個人を指して「……ヲミナ」という例は拾えないので、現状では「……娘子」の訓についての通説を動かしがたい。ヲトメの対語であるヲトコについても同様にしてみると、「……ヲトコ」にも前章で示したように、「秋山之下氷丈夫」「春山之霞丈夫」「月人壮子」「月詠壮子」「知努乎登古」「小竹田丁士」「宇奈比壮士」など、「……ヲトメ」と同じく特定の個人を指す例はある。しかし、それらは神話・伝説中、あるいは特別の見立てによる限定的なものばかりで（「難波壮士」へ四・五七七や「飛鳥壮」へ十六・三七九一）がもし特定の個人を意識しているとしたら、数少ない該当例となる）、ヲトメが有する現実の人間世界でも柔軟に展開している広さを持っていない（ある条件下での複数の男性を指す例としては、「東乎等故」へ二〇一四三三三）がある。

このような特定の個人を指す「……ヲトメ」「……ヲトコ」（「ヤマト」ヲグナ）という言い方は、ヲトメ・ヲトコ・ヲグナそれぞれの持つ特質を、地域などの他の条件の

範囲内で、よく保持・發揮している個人に用いられるものと見ておいてよいであろう。そうすると、こうした言い方がヲトメにおいて最も多く見られるということは、現代語の「……小町」のようにヲトメという語の意義的特質が社会的にかなり固定して認識されていたからだと思われる。つまり、それが結婚適齢期の若さであつたと判断される。

こうして、ヲトメの語は、対語であるヲトコが結婚適齢期の若い男性から青壮年一般へとその指し示す意義の内容を広げる傾向をもっていたのに対し、万葉第四期に至つても結婚適齢期の若い女性という特質を（巫女・神女等の場合を除いて）堅く有していたことが基本的に指摘できる。

五

このようなヲトメに対して、同じく女性に関わる語であるヲミナの状況は、ヲトメと比較して格段に用例数が少ないために、一段と把握しがたい。記紀万葉においてヲミナの仮名表記の例は四例しかない。

すくすくと我が行ませば 木幡の道に遇はしし袁登売
…… 眉画きこに画き垂れ 遇はしし袁美那……

（応神記）

ここでは矢河枝比売を「袁登売」とも「袁美那」とも言っており、阪倉氏が言われるように、両語に「年齢の似よ

り」（前掲書）のあることの証しではあろう。しかし、次の、雄略天皇が吉野の童女を歌つたところの、

吳床座の神の御手もち 弾く琴に 儼ひする袁美那
常世にもがも （雄略記）

の例は、この歌謡の前に「吉野之川之濱、有ニ童女一。其形姿美麗。故、婚ニ是童女」。……（後に同所で再会して）弾ニ御琴一、令レ為レ儼其嬢子一……」とあり、その文脈・用語・状況から、『古事記』の他のヲトメの例と同様、これもヲトメとあつて何ら差し支えないようにみえるのだが、ヲミナとなつてゐる。これもヲトメとヲミナの似よりなのであろうが、ヲトメの例と異なる点を指摘すれば、「神の御手もち」とあるごとく、神の存在が介入していることである。琴を弾いているのは、詠者である雄略天皇自身であるから、神は雄略天皇自身、あるいは雄略に合一した存在であり、結局、このヲミナは、神である雄略天皇の立場からそう捉えられ表現されているわけである。前章で、私は、呪術的・祭祀的性格を有する場でのヲトメの存在を指摘した。それは、考えてみれば、神ならぬ人間の立場から、神や精霊の勢力圏内の女性として彼女を、おそらくある価値付け（例えば神の花嫁・奉仕者・神女など）のもとでヲトメと呼んでいたわけだが、同種の存在が、ここでは神の立場からは単にヲミナと捉えられたと解するこ

とが可能なのである。この童女が神女であつても事情は同様に解される。また、次の例も「(舎人) 壮^{ヲト}」との対照で「宮ヲトメ」とあつてよさそうなのに、そうでないものである。

うちひさす宮尾見名 さすたけの舎人壮も、忍ぶらひかへらひ見つつ 誰が子そと思はえてある……

(巻十六・三七九)

この場合も、ヲトメとの相違をあえて探れば、詠者でかつ話題中の主である若かりし時の竹取翁にとつて、この「宮尾見名」は、「舎人壮」同様、若盛りの美男の翁に目をひかれはするが、それだけの観客に過ぎず、翁にとつても彼女が恋愛や遊びの対象ではなかつたという点が指摘できる女性としてある価値付けが特にはされていないのだと見られる。

秋野には今こそ行かめもののふの乎等古乎美奈の花に

ほひ見に

(二〇—四三—)

阪倉氏はこの例を、ヲトコ・ヲミナという一对の關係が成立したことを示す例としてあげられているが、家持のこの歌の成立以前に前例のごときものも既にあり、一概にそうも言えない。このヲミナは「花にほひ見に」とあることから、若い女性を想起しやすいが、例えば、天武紀十三年閏四月の詔には「女年卅以上、髮之結不結、及乗^レ馬縦横、

並任^レ意也」とみえ、当時ではもう老齡と言うべき者も官女として天武の朝廷に仕えていたことがわかる。また、後宮職員令十八条では、諸氏から貢ぐ氏女について、「皆限三年卅以下十三以上」とあり、その上限はヲトメと呼ばれていたかどうか疑わしい年齢である。後になるが、令集解所引大同元年十月十三日の官符には、氏女の制がこの間守られなくなつたので、改めて、「端正女」で、しかも「十三已上」では「心神易^レ移、進退未^レ定」であるから、「年卅已上卅已下、時無^レ夫者」を選んで貢げとある。つまり、家持がこの歌を詠んだ天平勝宝六年当時の官女たちの年齢の正確な状況は今明確にしがたいが、律令国家において、結婚適齡期の若い女性以外にも、もののふのヲミナがまずは常に存在していたと考えておくべき状況があるのである。

以上、わずかな例ではあるが、ヲミナはやはりヲトメとそれなりの差をもつてこれらでも用いられていたと解すべき余地がある。その差を不明瞭ながら推測しておくならば、ヲトメの結婚適齡期の若い女性に対して、ヲミナの方は、阪倉氏がいわれる「少女」というよりも、ヲトメを包み込んだもつと広い範囲の女性を一般的に指していた語ではなかつたのであろうか。その指す範囲は、ヲミナが、ヲグナ・オミナ・オキナと語彙構造をなし、老女を意味するオ

ミナと対していることから、赤子や幼児は分らないが、⁽¹⁵⁾少なくともオミナの指す老女を除く女性ではあったと思われる。従つて、現行の辞書記述にみえる、ヲミナについての、若い女・美女・女性一般などという説明は、正確にはみなあてはまらないことになる。美女という説明は、『万葉集』にみえるヲミナヘシ（ミ・ヘはともに甲類）の表記、「佳人部為」「美人部師」「姫部思」や、『新撰字鏡』にみえる「平美奈」の訓をもつ「嬢」字の語釈「婦人美也。美女也」などに主に拠つていたのであるが、ヲミナが美女を指すという確例は以上のように見いだしがたい。

記紀万葉以外に目を転じても同様のことがいえる。『肥前風土記』杵島郡条には「嬢子山 在ニ郡東北一同（＝景行）天皇、行幸之時、土蜘蛛八十女 又有ニ此山頂一常押ニ皇命一不肯ニ降服一於レ茲 遣レ兵掩滅 因曰ニ嬢子山一」とあるが、この「嬢子山」は、『肥前風土記新考』がいうように現佐賀県多久市東多久町（旧小城郡）と江北町大字山口（杵島郡）との境にある両子山の女岳（女山）に比定してヲミナ山と訓んでおくのがよいであろう。多久市西多久町にも女山（別名、船山。南麓に女山村もあった）があるが、こちらは杵島郡に属さない。郡家の東北に在ると言う点からも両子山のほうがよい。従つてこの肥前風土記の例は、ヲミナに「嬢子」をあてたことの確かな

早い例として注意されるが、それはともあれ、地名説話において、ヲミナの語と拘わりをもつはずの「土蜘蛛八十女」は、結婚適齢期の若い女性か老女と判定できる指標を示さないから、ヲミナと捉えられても、先のヲミナについての理解からはずれない。また、この「土蜘蛛八十女」を古典大系注のように巫女と解するなら、敵対する存在であった巫女を国衙や朝廷の側からはヲトメでなくヲミナと把握したことになり、先の雄略記の吉野の童女の例と響き合う性格のものとなる。

さらに、『日本靈異記』⁽¹⁶⁾には、ヲミナの訓釈が四例みられる。その内二例は、当該女性が結婚適齢期の若い女性であるとみうる指標がない一方、老女とも見えないものである。下巻十八話の「嬢」は「ヲミナノ」と訓まれるが、「女衆」の一員で「女」とも表記され性行為の対象となっただけである。また、下巻三九話「我必宿ニ於日本国王之夫人丹治比嬢女之胎一」の「嬢女」は「遠三難」の訓釈を持つが、説話の主、善珠禪師がこの神託を得て没した延暦十六年（七九七）当時、この「嬢女」、すなわち桓武天皇夫人多治比真人真宗の年齢は二十九歳であった。これらは、これまでのヲミナの性格と齟齬を見せない。しかし、残りの二例は、記紀万葉ならヲトメと訓まれてもよさそうな箇所⁽¹⁷⁾に用いられながら、先の古事記・万葉集のヲミナの例と

異なり、ヲトメとの差別化の指標を見いだしたがたいものである。上巻二話「応^レ為^レ妻^レ寛^ニ好嬢^一」の「嬢」は「乎見奈」の訓釈を持つが、「姝女」「稚女」ともあるから、ヲトメと訓まれてもよさそうなのにそうはなっていない。また、ヲトメがヲミナと把握されるような神などの特殊な要素も介入していない。「嬢女」に「ヲウナ」の訓のある中巻三四話（国会図書館本）も、「未^レ嫁无^レ夫」とあり、「壮」（訓釈、乎土古尔）とも対応しているので、同様の状況下・環境にある。つまりこれらは、『日本霊異記』に訓釈の施された平安初期において、従来ヲトメを用いた状況下でも、ヲトメでなくヲミナを用いることが普通になっていた様子を示しているとみられる。以後、中古では、ヲトメは、万葉歌とその影響下にある歌を除いて、天女、それと繋がる五節の舞姫・妓女、巫女の意味に限定され、位相としても和歌と歌語関係に限られてしまう。

六

以上、ヲグナ・ヲトコ・ヲトメ・ヲミナの、上代における様相を見てみると、ヲトコとヲトメは、本来結婚適齢期の若い男女を指していたが、ヲトコはその指示範囲を壮年にまで広げていたのに対し、ヲトメは結婚適齢期の若さという当時の女性に求められた一つの価値に拘束されて、指

示範囲の変動をほぼ見せていなかった。また、ヲグナとヲミナは、オキナとオミナに対応する形で、ともに形態的には対になっていると見なされるのに、意義的には、ヲミナが成人から成人前¹⁹の女性を広く指したかと思られるのに対して、ヲグナは十五・六歳頃の男子のみを指していた。ここに、ヲグナとヲミナにおいて、形態が対応するのに意義が対応していないという矛盾が存在するのだが、この矛盾は、現在残されている文献等の資料の制約からもたらされた結果であると思われる（ヲグナにはヤマトヲグナノミコトの名と、これから見通される「童男」の語しか確例がなかった）、やはりかつてはヲグナもヲミナと同様に成人の男性までも指示していたのだと考えておきたい。そう推測する理由は、オキナ・オミナ・ヲグナ・ヲミナの語素にみえるオ・ヲに求められる。オ・ヲは阪倉氏も言われるように、「お」で年長の方を、「を」で年少の方をそれぞれ区別して表したものであると考えられ、「お」が大を意味し（おそらく、「おほし」の「おほ」と関係がある）、それに対して「を」が小を意味し（前掲書）ていたと見られる。その年長年少の関係を人についての具体例でみると、同氏もあげる市辺之忍齒王の子である兄の意祁王（後の仁賢天皇）と、弟の袁祁王（後の顕宗天皇。安康記）の場合が対象となる。この二人は兄弟であるから、年長・年少の差は

あるが、その差は、老男女（オキナ・オミナ）と少年少女（童男・童女）というような対極のかつ断絶的なものではなく、あくまでも生まれた時期の早晚という年齢差の少ない相対的連続的なものである。このことは阪倉氏も示唆されているオホとヲにまで範囲を広げてみても認められる。景行天皇の皇子である大碓命と小碓命（倭建命）の兄弟の場合は事情が全く一致するし（景行紀では双生児）、オホヂ（祖父）とヲヂ（伯父・叔父）、オホバ（祖母）とヲバ（伯母・叔母）も、双方の関係が生じる基点である孫（甥・姪）から見るならば、ともに年上である人物間相互の相対的な年齢差を示す。つまり、ヲグナ（ヲキナ）とヲミナは、オキナとオミナに年齢的に連続する非オキナ・オミナの男女、即ち、壮年から成人前後までの（乳幼児は不明につき一応除いておく）年少の男女の一群を本来は指示していたのであろうと思われる。だから同一地名のヲミナ郷が、「童女」とも「嬢（里）」とも表記されえたのだと見られる。

ただ、ヲグナ（ヲキナ）が早い時期に、「童男」という限定的な年代の男性を指すように変動してきた背景には、結婚適齢期の若い男性を表していたヲトコがその指示対象を広げて来たことの影響がやはり決定的だったろうと思う。ヲトコが指示対象を広げてくれば、それはヲグナ（ヲキ

ナ）の指示範囲とほとんど重なってしまうからである。そうした中でヲグナは「童男」に特化してきたように資料的には見える。

このような指示範囲の変動・固定の中で、元来対応していたヲトコとヲトメ、またヲグナ（ヲキナ）とヲミナの対応性が崩れ、結果的に年齢的な指示範囲が相似し、新たな対応性を構築してきたのが、ヲトコとヲミナだったのだと思われる。しかしながら、上代では、呪術・祭祀の場は勿論、求婚・通婚という性格の場では依然としてヲトコとヲトメの対応が基本であった。この対応を打ち破って、求婚・通婚という場においてヲトコ・ヲミナの対応が普及してくるのは、『日本霊異記』訓釈の成立する平安初期頃と見てよいのだろう。その普及の陰には、ヲグナ（ヲキナ）と類比的なヲトメの意義の固定・狭化（特に呪術・祭祀・神女・仙女等の面で）と、ヲミナの美女というニュアンスの添加とが関与していたかも知れない。

ただ、この段階では、ヲトコとヲミナ（ランナ）の両語は、オキナ・オミナ（オウナ）を呑み込んで、ヲ（ノコ）・メ（ノコ）に代わる男女の総称の地位をいまだ獲得していない。残念ながら本稿は、ヲトコとヲミナの語彙的な対応の成立する地点までの検討で終わるが、男性・女性を意味する諸語の中で、人間の評価の面も含めて（例えば、

中古においてヲノコは下位や身内の男子を指すなど価値観を伴うのが一般。質量両面における中核的な部分を、ヲトコとランナの両語が占める段階に至れば、この両語が男女の総称の地位を襲うのも時間の問題と言えよう。平安初期のヲトコとランナは、もうそうした位置に着いているようだ。

(注)

(1) 古事記の引用は西宮一民編『古事記 新訂版』による。ただし、歌謡については必要部分を除いて漢字仮名交じり表記に直して示す。

(2) 新訂増補国史大系8による。

(3) 大野晋『日本語をさかのぼる』。

(4) ヲ・メとは異なるコ・メという語素の対応は、ヒコ・ヒメ、イラツコ・イラツメ、ムスコ・ムスメ等にも見られる。なお、コ・メは語素であり、ヒコ・ヒメ以下の諸語は男女の一般称ではないので、ともに以下小稿では特に扱うことをしない。

(5) 大野・阪倉両氏の他にも、はやく高崎正秀氏の『物語文学序説』に、これらの諸語の語彙構造についての発言がみられ、また佐藤亨氏の「上代・中古における親族語彙——オトコ(男)・オンナ(女) オット(夫)・ツマ(妻)を中心に——」『日本語日本文学2』(創価大 平成四年三月、にヲトコ・ラムナを表す語彙の一覧・変遷の素描が見られる。

(6) 『日本書紀』の引用は日本古典文学大系本による。

(7) 清寧記「焼^レ火少子二口、居^ニ竈傍^一、令^レ儻^ニ其少子等^一」の「少子」「少子等」に、貞享四年刊竈頭古事記は「ヲクナ」「ヲクナ^ラ」の訓を付しているが、これが上代にまでつながるものかは疑わしい。また神代紀上第八段「書第六に、少彦名命を「小男」の語で表記し(書記の唯一例)、これをヲクナと訓む説もあるが、本文自体や『日本書紀私記』にその根拠が見いだせない。さらに新訂増補国史大系本によれば仁賢紀元年二月条「童女君」の「童女」に鈴鹿氏所蔵中臣連重本では「ヲクナ」の訓があり、それとの関わりがあるのか、雄略紀元年三月条の同一人物をさす「童女君」に書記集解は「ヲクナキミ」の訓を付すが、ともに「童男」からの類推によるさかしらと見られる。

(8) 吉井巖「ヤマトタケル」二五頁。

(9) 有坂秀世『上代音韻攷』四〇四頁に見える乙類のイの音価についての言及に基づく。

(10) 『万葉集』の引用は日本古典文学全集本による。

(11) 木下正俊氏は『萬葉集全注卷二十』で、「岸氏の『防人考』には大宝・養老の戸籍による兵士の年齢別の実態が表示されており、それによれば二十歳代で50%、三十代が35%、四十代15%となっている。防人のそれも大体同じであったとしたら、ヲトコと呼ぶには老け過ぎた補充兵のような古顔も交じっていたのではないか」と言われる。

(12) 二卷二一〇番歌に「鳥穂自物」(原文「鳥穂自物」)、その異伝歌である二一三番歌に「男自物」の表記がある。

(13) 未刊国文古註釈大系三による。

(14) 例えば、『古事記』において歌謡中のヲトメの仮名書き例の前後に頻出する「嬢子」の語を、「結婚の相手としての女性を表

し、その用法が「美人」に通ずるのでヲトメと訓むことが出来る」(日本思想大系古事記、五三七頁)といったような、ヲトメの語義を先立てて漢語の訓を決定していく立場をここでは採らない。今は考察の方向が逆だからである。ちなみに、「嬢子」については、神田秀夫氏に次のような指摘がある。曰く、『古事記』において「嬢子」「嬢女」が指示する女性性は身分や待遇において選ばれた人物ばかりで、これらは「単なる『袁登売』以上の何らかの讃稱を含んだ語に宛てられた字だったのではあるまいかと思はれ」、ヲトメと通常訓まれている他の「(八)稚女」「童女」「美人」「嬢女」「少女」の語と同様、「嬢子」までもヲトメと訓むくらゐならば、『袁美那』(老女のオミナでなくてヲミナの方)と訓ませた方が寧ろ妥当だと思ふ。『嬢子』は本来さういふ漠とした女性一般を謂ふ言葉なのである」と、『嬢子』と『郎女』『国語と国文学』二十九一六、昭和二十七年六月)。

(15) 「嬢婦」の「嬢」は他にその存在が確認されないが、尾崎知光氏は、「嬢」は「嬢」「嬢」などの誤りで、「ともに、すらりとして美しい女のさまを表す字であるらし」い、といわれる(『万葉集の嬢婦』『訓点語と訓点資料』六十二、昭和五十四年三月)。

(16) 「老人も女童児もしが願ふ」(万葉集十八一四〇九四)の「女童児」を、それまでの「メヌワラハコ」と異なり、代匠記精撰本に従つて「ヲミナワラハ」と訓むならば、ヲミナはワラハとも対立することになる。

(17) 『万葉集』では、ヲミナヘシを、他に、「女郎花」「娘部志」「娘子部四」などと表記し、「女郎花」や「佳人」「美人」「姫」の語を含む表記を用いる例が第二期から第三期にかけて、「娘」「嬢子」を含む表記を用いる例が第三期から第四期にかけてみえ

る。また、「乎美奈弊之」などの一字一音仮名例は第四期の家持周辺に集中する。

(18) 『日本霊異記』の引用は日本古典文学大系による。

(19) ヲミナが成人前の女性をも指したと見られるのは、ヲグナがそうであることとの対応と、高山寺本「和名類聚抄」郷里部等に見える信濃国小縣郡「童女」郷の訓「乎无奈」(ただし、『日本霊異記』下巻三話では同郷が訓釈なしに「嬢」里」と表記されている)、また雄略紀元年三月条の「童女君」が、兼右本(天理図書館善本叢書)などで「ヲナキミ」(左傍訓、オンナキミ)とあることによる。